

第22回全国大会の開催に向けて

第22回全国大会 実行委員長
鈴木裕輔（名城大学）

今回、日本国際文化学会第22回全国大会を名城大学において開催することになりました。本学会の全国大会が中部地方で開催されるのは、今回が初めてとなります。こうした機会を得られることは名城大学の名誉とするところであり、学会の皆さまのご支援に御礼申し上げます。

オンライン開催となった第20回全国大会、3年ぶりの対面開催が実現した第21回全国大会と、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況の中でも、学会の活動の根幹である全国大会は、着実のその歩みを進めてきました。そして、今回の第22回全国大会では、2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症が現行の二類感染症から五類感染症に移行し、各種の規制が撤廃ないし縮小される見込みです。

もちろん、「二類から五類へ」は制度上の措置であり、こうした移行によって新型コロナウイルス感染症がたちどころに雲散霧消するものではありません。また、人々の日常生活のあり方を一変させたといっても過言ではない新型コロナウイルス感染症に伴う種々の制約が緩和される中での全国大会も、「コロナ前」と同様の戻ることは難しいかも知れません。

それでも、過去3年間にわたり学会が蓄積し、各全国大会の実行委員会の皆さんが実践してきた感染症対策を参照しつつ、参加者の皆様により快適で充実した全国大会を挙行できるよう、実行委員一同、最善を尽くしてまいります。



開催日：2023年7月8日（土）、9日（日）

開催場所：名城大学ナゴヤドーム前キャンパス

所在地：461-0048 愛知県名古屋市東区矢田南4丁目102-9

連絡先電子メールアドレス：zenkokutaikai2023@gmail.com

連絡先所在地：468-0073

愛知県名古屋市天白区1-501 名城大学国際化推進センター気付

日本国際文化学会第22回全国大会実行委員会（実行委員長 鈴木裕輔）

*参加費、振込先及び参加申込み方法については、学会公式ウェブサイトなどでご案内いたします。

*新型コロナウイルス感染症の感染状況及び行政機関等からの指導等により開催形式が変更される場合がありますので、予めご承知おきください。

第22回全国大会テーマ 世界の中の日本と日本の中の世界

今回の全国大会のテーマは「世界の中の日本と日本の中の世界」です。

「世界の中の日本」もしくは「日本の中の世界」という表現は、一見すると古色蒼然としたものかもしれませんが。また、かつては“Japan as Number One”といささか屈折した内容を伴いながらも国際社会における経済的な存在感の高さを評価されたものの、1990年代初頭のいわゆるバブル経済の崩壊後は「失われた10年」が「失われた40年」になろうとするかのように、日本の経済成長は低迷しています。さらに、人口の減少に伴う労働力の不足や、移民の受け入れの是非、あるいは社会における多様性の実現といった問題は、遠い将来の出来事ではなく、現在のわれわれを取り巻く切実な課題です。

こうした中で、あえて古典的ともいえるテーマを設定したのは、上記のような日本の行く末を左右するような大きな問題だけではなく、より身近な事柄から出発し、既存の問題の枠組みにとらわれないのではなく、今まさに起きている様々な出来

事まで視野に入れた、多様な話題を参加者の皆さんとともに考え、よりよい回答を見つけるための第一歩を踏み出すための機会にしたいと願うからです。例えば、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が、これまで密接に結びつけてきた世界各地の関係を分断し、時には根拠のない憎悪や対立を招いたことや、ロシアによるウクライナ侵攻が既存の国際秩序に動揺をもたらした国際社会における日本のあり方に再考を促していることもわれわれが日々実感するところです。また、例えば留学生の派遣や受け入れといった現在の日本の大学にとって重要な問題も、こうした巨視的な日本と世界とのあり方と無関係ではありません。

その意味で、今回の全国大会は、伝統的な話題から出発し、われわれの身近な課題へと立ち戻り、そして新たな解決策を模索することを目指すものとなります。

日本国際文化学会の内外から、多くの方のご参加をお待ち申し上げています。

大会スケジュール

大会スケジュールについては今後学会公式ウェブサイト及び学会メーリングリストで詳細をご案内いたします。

共通論題一覧

田中佑実（北海道大学）

近代における西洋文明の受容と選択 ―周縁からのアプローチ―

齋川貴嗣（高崎経済大学）

『国民国家以後の時代』の国際文化交流再考 ―理念、主体、媒体を中心に―

岡真理子（元国際交流基金、帝京大学）

国際文化学における国際交流基金研究の意義と課題 ―特殊法人時代を中心に（1970年代～2000年代）―

堤ひろゆき（上武大学）

マンガはコミュニケーション・ツールになり得るか―マンガによる自己表現ワークショップの課題と展望―

松居竜五（龍谷大学）

鶴見和子の生涯と内発的発展論

*氏名及び所属は代表者のみ記載、申し込み順

【自由論題発表申し込み】

2023年3月20日（月）が申し込み締め切りとなっています。詳細は学会公式ウェブサイトをご覧ください。

大会会場への交通アクセス

(1) 名古屋市営地下鉄（約20分）

[名古屋駅] → (東山線・藤が丘行き) → [栄駅] →
(名古屋市営地下鉄名城線右回り) → [ナゴヤドーム前矢田駅]

(2) 名古屋市営地下鉄（約22分）

[名古屋駅] → (桜通線・徳重行き) → [久屋大通駅] →
(名古屋市営地下鉄名城線右回り) → [ナゴヤドーム前矢田駅]

(3) JR東海（約15分）

[名古屋駅] → (中央本線・高蔵寺行き) → [大曾根駅] →
(名古屋市営地下鉄名城線右回り) → [ナゴヤドーム前矢田駅]

*所要時間は目安で、運行状況により異なりますので、ご注意ください。



【宿泊先】

- ・ 宿泊に関しては各自で手配をお願いいたします。

・ 全国大会の開催日である7月8日（土）及び9日（日）は会場である名城大学ナゴヤドーム前キャンパスに隣接するバンテリンドームにおいて中日ドラゴンズ対広島東洋カープの公式戦が開催される予定ため、宿泊先については早めの手配をお勧めします。

特別企画 会長・副会長座談会

ニューズレター特別企画として、会長と副会長に本学会についてお話しいただきました。

会長：都丸潤子
副会長：葉柳和則
川村陶子
(聞き手：松居竜五)

——まずはご自身のご研究と日本国際文化学会のつながりについてお話ください。

都丸：本格的に参加させていただくようになったのは、早稲田に移ってからの2007年くらいです。私自身の研究の中心は人の国際移動とそれから文化変容、文化外交の面にあります。主に歴史研究をしている関係で、イギリスを中心に、脱植民地化過程の人の移動ですとか、イギリス政府の日本や東南アジア諸国に対する文化外交を中心に研究をしております。最近は特にユネスコ設立過程で、イギリスが第二次世界大戦から戦後にかけてリーダーシップをとろうとした際、フランスとのライバル関係や、他のヨーロッパ諸国の文化復興のあり方をどのように折り合わせていったのかに興味を持っています。

葉柳：私は日本国際文化学会の全国大会が山口県立大学で開催された際、同僚の森川裕二先生から、「多文化について考えるためのヒントがたくさんある学会なのでぜひ一緒に入ろう」と誘われ、入会させていただきました。宮崎公立大学や多摩大学での大会を経て、長崎大学で全国大会を開催することになりました。その時に、何とか大会を成功させねばという思いで学会執行部や理事の先生方の教を乞い、気がついたら副会長になっていました。私のもともとの専門は、戦後のスイスを代表する劇作家のマックス・フリッシュの美学なのですが。フリッシュの仕事の社会的背景について調べていくうちに、1930年代のスイスで生まれた文化運動である「精神的国土防衛」の重要性に気づきました。この運動について研究していくうちに、文学研究の外に出て、歴史や政治の領域に踏み込んでいくことになりました。同時に、ドイツ・フランス・イタリアといった隣接する大国との国際関係のなかでスイスの文化政策について考える必要がでてきました。つまり、自分の研究が国際文化的になりつつあるタイミングで、ちょうどこの学会に入会する機会を得たわけです。

川村：私は、学会とのご縁はもしかすると三人の中では、一番早くできたのかと考えております。2001年11月に学会創立されたとき、龍谷大学の設立大会にもお邪魔しました。ちょうどその少し前の2000年に、現在も勤めている成蹊大学文学部の国際文化学科に着任した私は、この学会の先生方との交流から教学に関するたくさんのお話を学ばせていただきました。研究テーマはドイツの文化外交、国際文化交流の歴史的展開です。これに加え、自治体・草の根レベルの多文化共生政策、ユネスコ委員会など、様々なアクターが国際文化関係を織りなしていく、その総合的な広がりに興味を持っています。

その一方で、9.11同時多発テロが発生、その後2000年代以降にはドイツを含む西ヨーロッパの移民諸国でテロが起こり、自分が興味をもっていた文化交流の活動や事業が効果を上げるどころか、むしろ裏目に出ているのではないかと考えさせられました。『インターカルチュラル』第10号に投稿させていただいた論文は、そうした異文化間対話の難しさと可能性を考察したものです。もともと「文化でつくる国際関係」においていた関心が「異文化関係としての国際関係」にも広がって、欲張りに気まぐれに過ごしています。

——先生方から見て、この学会の魅力はどのようなところでしょうか？

都丸：何よりも多様な分野の先生や学生さん、院生さんがいらっしゃることが一番の強みだと思います。社会科学から人文科学、コミュニケーション論、そして文学、政治学、社会学、文化人類学——それぞれ皆さんが専門とするフィールドをお持ちで、愛着を持ちながら研究されているというのが感じられます。また、皆さんがそれぞれ色々なつながりでこの学会に集まってきてくださる。学会員の先生の熱いご指導により、この学会にも関心を持って来てくださった方もいらっしゃるし、ご同僚との誘いでご参加いただいこともあり、本当に入り口が多様です。他の学会と比較しても、世代間のつながりが強いのではないかと思います。ICCOでは、学生さんたちが社会に出たときの実践と直結する事業であり、ここまで直接的に若い方を集め、資格を差し上げて、社会での活躍に繋げる活動をしている学会は他にありません。そして何より、一緒にいて多くの発見があって楽しいんですね。大会で対面でお話したり、懇親会でお話すると、本当にいろいろなご経験のお話を聞かせていただき、いろんなところで繋がりがあったり、実は知らないところで繋がりがあったりして、それがとても楽しいと感じます。

葉柳：日本国際文化学会の会員のほとんどは、少なくとも一つは別の学会にも入っておられると思います。若い頃はディシプリンのはっきりした学会が研究活動のベースとしてあり、その後色々なご縁のなかで、日本国際文化学会に入会するというパターンが多いのではないのでしょうか。若い院生たちは一つのディシプリンとのなかできちんと評価される業績を出す力を身につけた方がいいとは思っています。ただ自分が研究していくなかで、内在的な必然としてある一つの学問分野を越境していくことは当然あると思っています。日本国際文化学会は、そのような学問的越境者を受け入れてくれる、寛容な学会だというのが、この学会に対する私の一番の印象です。

例えば、私が精神的国土防衛の国策レベルの根拠になっている内閣教書について、宮崎公立大学で報告させていただいたとき、いろいろな専門分野の方が質問してくださったり、情報交換会の際にアイデアを共有してくださったりしました。そうしたご質問やアイデアは、自分の専門分野の枠組みの盲点をきちんと指摘してくださっていることが多く、やりとりを通して非常に鍛えられました。なので、ある種の他流試合、つまり、色々な流派が一堂に会して、それぞれのお互いの長所を見せ合い、教え合う場となっているのがこの学会だと思うわけです。

川村：この学会の特徴の一つは学際性です。いろいろな分野の方々が、異種格闘技のように、それぞれのテーマを自由に発表しあい、今まで気づかなかった視点からツッコミや提案がいただけるというところですね。二つ目は、教育へのコミットメントです。とりわけ、ICCOをはじめとして学部生に対しても学会の活動が開かれていることがとてもいいなと思います。私の勤務する大学では、研究者志望の学生はほとんどが他大の院に進学しますが、専門研究者にはならないけれどもユニークな卒業研究を行う学生がたまにいます。そういった学生たちが全国大会の自由論題セッションで卒業論文の報告をさせていただき、貴重なご助言、お励ましを頂戴しました。学会報告の経験が後押しとなり、現在に至るまで、社会人と二足の草鞋で研究を続けている人もいます。この学会で、そういった人も温かい目で見て育ててくださるといのは本当にありがたいことです。三つ目に、学会の成り立ちとも関係するかもしれませんが、国際文化を看板に掲げる学部学科をもつ大学単位の参加がみられることがこの学会の特徴のひとつになっていると思います。各大学の特色や教育の性格も見えてきて、それも非常に勉強になります。

会長と副会長の座談会は、学会の現在、そしてこれからのことをめぐり、さらに熱さを増していきます——

都丸：この学会には留学生の方が多くですね。先生方は留学生のご指導など、印象に残られたご経験はおありでしょうか。

葉柳：留学生を指導してよかったと思うのは、ゼミが活性化することです。日本人学生は院生になっても、ゼミでディスカッションをするときにものおじする傾向がありますが、留学生は自分の考えをはっきり言うだけではなく、私が「いや、こう考えた方がいいんじゃないか？」と言っても、納得しなければ食い下がってきます。それが、次第に日本人の学生にも影響して、演習での議論が活性化していくのを目の当たりにするのは教師冥利に尽きます。留学生と日本人学生がうまく混ざっていくことによる活性化効果は間違いなくある、という手応えを感じています。

川村：この学会ではいつも自由論題などでたくさんの留学生の方々が報告者になられており、ご発表を伺うのが毎回楽しみです。日本の現代社会や文化・歴史についてのご研究が多く、普段思いつかないような視点から食いついてきてくださり、刺激的です。

都丸：すごく発信力おありになる方が多くて、学会報告を伺うと、熱い。伝えようという意欲を強く感じます。もちろん日本人の方もそういう方が多いですけども、すごく聞かせる発表が多い。川村先生がおっしゃったように、新しい視点を学べることもあるんだと思います。日本文化や日本の歴史がこういうふうに見えているのかという、新しい視点に気づかされることも多いんです。故国に帰られても、海外から『インターカルチュラル』に寄稿してくださる方が今後増えるといいなと思ったりしています。

——留学生として日本で活躍されている方が増えていきますし、海外で活躍されている方もうまく繋がれるような制度が作れていくといいですね。

川村：コロナ禍で学会活動が制約され、オンラインで発表できるようになったことで、中国に在住されている方が現地から研究報告をして下さるような例もでてきました。これから対面の機会が復活してまいります。オンラインのメリットを生かして学会活動を続けられるといいなと思っております。

都丸：オンラインの良さは、海外からもアクセスしていただいたり、ご家庭の事情で遠出ができない方も大会に参加していただいたり、報告していただいたりできることにあります。育児や介護の間でも大会に参加できるという良さも生かしていきたいですね。

——最後に先生方の今後の展望をお聞かせください。

都丸：ZOOMの活用もできるようになりましたので、30周年記念くらいまでの間には一度くらい海外で大会の開催があると面白いかなと思います。

川村：海外とのつながりには、開拓の余地はあるかもしれませんがね。例えばシンポジウムではZOOMでいくつかの国の研究者などにディスカッションしていただくとか。もちろん対面で現地に行ければ素晴らしく楽しいと思いますが。

葉柳：他の学会では、長崎-上海航路が一時的に復活したときに、フェリーを使って、日本と中国の国境を空間的に越えながらで学会を開こうという話で盛り上がったことがありました。この学会でも一度くらいそういった国境を越える試みをやってみたいですね。

——先生方、本日はありがとうございました。



『インターカルチュラル』20年の歩み

学会年報『インターカルチュラル』の二十年間について、
小林文生編集委員長にお話を伺います。

編集委員長：小林文生

年報編集委員会委員長として、年末年始を忙しく過ごしているうちに、はや1月も終わろうとしています。今、編集作業に追われながらも、全てのバックナンバーを見直していると、創刊号（2003年7月30日発行）から今日に至る20年間の蓄積の重みをあらためて実感するとともに、創設時からの会員ではなくとも、その時間の流れの中に確かに自分がいるという感慨が湧いてきます。

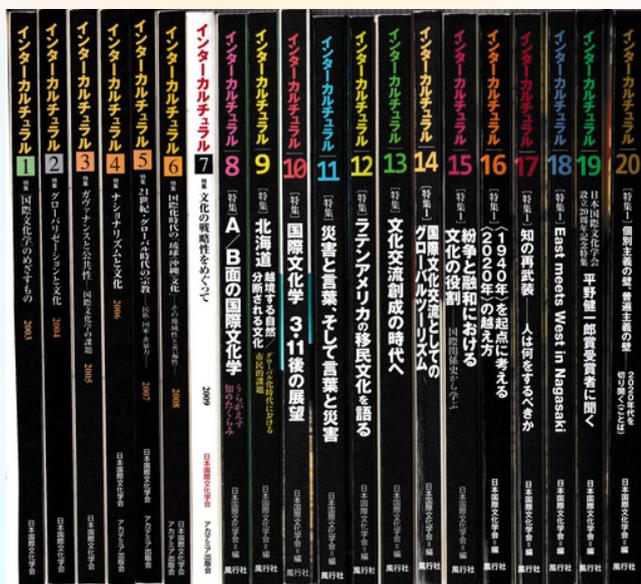
まず、目次を見ると、その構成が創刊号から踏襲されて今日に至っています。すなわち、（特集、研究論文、研究ノート、実践レポート、研究動向、書評）という基本構成です。また、いくつかの際立った特徴がすぐに目につき、例えば、特集は基本的に全国大会のシンポジウムないしフォーラムを反映していること、実践レポートが（特に草創期に）重要な位置づけを得ていること、書評とは別に、第2号の「国際文化学ブックガイドの試み」および第3号の「国際文化学ブックガイド」を引き継ぐ形で、第4号から「国際文化学私の三冊」が掲載され始め、これが今に至っていることなどです。これらはいずれも、国際文化学というディシプリンが「生成しつつある」（第4号編集後記／熊田泰章編集委員長）ものであることに基づく多角的な視点を反映していると言えるでしょう。

内容としては、まず何よりも創刊号巻頭の「創刊の辞」を思い起こすべきでしょう。平野健一郎先生はそこで『インターカルチュラル：日本国際文化学会年報』の刊行を、「文化と、文化間の関係を新しい、

国際的な視点から考察するフォーラムの一つとして」と位置づけて、さらに同号の特集「[国際文化学]のめざすもの」に寄せた「国際文化学への期待」において、人々と文化の独自性と多様性を保つことを、「国際文化の理論に課せられる難問の一つ」とした上で、国際文化学が「新しいパラダイムを生み出す」ことへの期待で文章を閉じておられます。この期待に応えるべく、公共性、ナショナリズム、文化の戦略性、等々のキーワードのもとに毎号の特集が生まれ、その間に、第8号より研究奨励賞、平野健一郎賞受賞者の紹介が、また第14号より文化交流創成コーディネーター資格認定とその報告が連続して掲載されて、本学会の研究教育の貴重な活動の歩みを反映しています。

その延長上で、第19号特集「[日本国際文化学会設立20周年記念特集]平野健一郎賞受賞者に聞く」には、参加者それぞれの声が、いわば本学会を象徴するようなポリフォニーとなって響き合う様子が読み（聴き）取れて心地よく感じられます。その司会をした立場から、ニューズレター48号に一文を寄せたのがつい先日のことのようです。そして今、『インターカルチュラル』20年の歴史を経て、第21号刊行に向けて、編集委員の皆さんの献身的な協働の中で、現在進行形の国際文化学の展開そのものに携わる幸せを噛み締めています。

この虹の足をはるかに望みつつ
あなたとともに弧を描きゆく（文生）



『インターカルチュラル』の背表紙：創刊号（2003年）から第20号（2022年）まで

WWW.



編集委員：齋川貴嗣

現在年報編集委員会は、国立研究開発法人科学技術研究機構が運営する「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)を利用した『インターカルチュラル』のオープンアクセス化作業を進めています。近年国内外を問わず学術誌の電子化が進んでおり、本学会誌に対しても若手研究者を中心にインターネット上での閲覧を可能にしてほしいという要望が寄せられていました。編集委員会をはじめ学会内で慎重に議論を重ねた結果、2023年3月末刊行予定の『インターカルチュラル』第21号からJ-STAGEでの閲覧を可能にし、バックナンバーも順次オープンアクセスで公開していくこととなりました。刊行後2年間は会員限定閲覧とし、パスワードはニュースレターやメーリングリスト等でお知らせする予定です。ただし、オープンアクセス化後も、紙媒体での『インターカルチュラル』の発行は継続します。

オープンアクセス化による『インターカルチュラル』の今後の展望として、第一に、より広い研究者コミュニティに研究成果を共有できることが指摘できます。オープンアクセス化によって論文被引用数が増加するかどうかは不明ですが、多様な分野の非学会員研究者の目に触れることは間違いありません。この点は、学際性を特徴とする本学会誌にとって特に重要です。また、今後は海外研究者を念頭に入れた外国語による研究成果のさらなる発表も期待されます。

第二に、オープンアクセス化はアウトリーチ活動にも資するものと考えられます。特に最近の学生はネット上での情報検索を第一としており、こうした傾向はコロナ禍によってますます強まっています。こうした風潮の是非はともかく、オンラインで閲覧可能な学術論文の教育的効果は飛躍的に高まっていると言えるでしょう。また、注目度の高いテーマについては、学生だけでなく広く一般社会の認知を得ることもあると思われれます。

第三に、上記のような利点と同時に課題も見出されます。オープンアクセス化によって不特定多数の人々に研究成果が共有されるということは、それだけ多様な意見と厳しい目に晒されるということでもありません。場合によっては「炎上」といったようなケースもあり得るかもしれません。ただし、こうした問題の大半は学術誌としての本来のクオリティを維持することで回避できると考えます。したがって、投稿者にはこれまで通り研究倫理の遵守を徹底していただくとともに、編集委員会は学問的厳正さを旨とした審査を実施することが引き続き求められます。

以上のように『インターカルチュラル』に結集した会員諸賢の研究成果が、オープンアクセス化を通して電子媒体・紙媒体双方で広く社会に共有されることを願っています。

私の研究歴—会員紹介

本号では月野楓子会員にご寄稿いただきました。
アルゼンチンの沖縄移民社会をめぐる研究の足跡を辿ります。

2022年は私の研究に関係の深いアルゼンチンと沖縄、二つの地域にとって重要な年でした。アルゼンチンについては、サッカーワールドカップでの優勝です。南米ではオリンピックより圧倒的に関心の高い一大イベントであり（アルゼンチンにおいてサッカーワールドカップは厳しい社会状況下で人々を励ますと同時に政治や経済、人権問題を覆い隠すのに都合の良いイベントであり続けてきましたが）、今回は特にメッシ選手に関するドラマと相まって大変な盛り上がりを見せたのは記憶に新しいところです。沖縄については、米軍占領下あった沖縄の施政権が日本に返還されてから50年目という年であるとともに、過去に沖縄から県内外へ移民した人々が「母県」である沖縄に約5年に一度集う「世界のウチナーンチュ大会」が、新型コロナウィルスの感染拡大による延期を経て開催された年でもありました。



「世界のウチナーンチュ大会」に参加する人は限られますが、「世界のウチナーンチュ」は現在約42万人いると言われています。沖縄移民社会では歌や踊りをはじめ沖縄の文化活動が盛んであり、海外における芸能の伝承・継承という側面は故郷を離れた人々の意識・アイデンティティーという側面とあわせて注目され、研究が蓄積されてきました。私自身もアルゼンチンで沖縄にルーツを持ち三線を手に民謡を歌う若者たちのグループ・Ryukyu Sapukaiの活動に惹かれ、彼らの活動を時代や社会背景の中で捉えようと試みました（これについては「Ryukyu Sapukaiにみる沖縄文化の『継承』—アルゼンチンの沖縄系下位世代に関する一考察—」として『インターカルチュラル』14号に所収されています）。

月野楓子（沖縄国際大学講師）

沖縄移民子弟による文化活動に関する研究を深めたいと思っていましたが、現地に長期滞在しての調査が諸事情により困難になったことに加え、そもそも移民初期の一世はいかなる形で自らの文化芸能を故郷から遠く離れた場所で実践していたのか知りたいと思い、時代を遡って調べるようになりました。沖縄を表象するものとして披露する芸能ではなく、生活と密着した（あるいは生活そのものである）文化をあえてつかまえる作業は難しいものでした。移民史や新聞といった刊行されている資料を手掛かりに移民社会について整理していきましたが、気が付いたらその中に残されたインタビューや記述から人々の声をあらためて聞き取る作業をしていたように思います。



アルゼンチンの沖縄移民の社会及び組織形成について、移民初期から第二次世界大戦後までの時期を対象として学位論文としてまとめました。そして、その時点では気が付かなかったことや十分に言語化できなかったことを加えて先日刊行されたのが『よりどころの形成史—アルゼンチンの沖縄移民社会と在亜沖縄県人連合会の設立—』です。「国際文化」と名の付く学部・学科に所属してきた私にはいつも専門性への不安があり、本も迷いながら書きました。今も逡巡していることだらけです。「国際文化」に関わられている皆様の多様な視点からアドバイスを頂けたらこんなに嬉しくありがたいことはありません。今後も学会でたくさんの学びと刺激をいただきながら研究を続けていきたいと思っています。

事務局からのお知らせ

2023年度のICCOに向けて

2022年度はオンラインにて開催したICCO短期集中セミナーでしたが、2023年度は京都にて対面開催を目指して検討中です。具体的な開催方法については、3月に学会ウェブページにてご案内予定です。

また、2022年度の資格認定申請受付は3月31日（消印有効）となっております。該当する学生がおられる場合には、申請を促していただきたく存じます。短期集中セミナーの参加学生のほか、学習活動報告による資格取得も可能です。

※詳細は学会ウェブサイトのICCO資格認定制度から、「2022年度版 学生からの申請（資格認定申請）」をご確認ください。

第22回全国大会自由論題発表者募集（締切：3月20日）

第22回全国大会の自由論題の発表者を募集しています。

- ・自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。
- ・応募は、氏名・現職・連絡先・自由論題発表題目・キーワード（3～5語）を冒頭に記し、発表要旨をつけて、全国大会実行委員会事務局までメールにて提出をお願いします。

※詳細は学会ウェブサイトの全国大会発表要項（PDF）をご確認ください。

- ・応募先/問い合わせ先：第22回全国大会実行委員会 zenkokutaikai2023@gmail.com

第13回平野健一郎賞募集（締切：4月30日）

第13回平野健一郎賞の募集を開始します。多数のご応募をお待ちしております。

応募に関しては学会ウェブサイトの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

- ・応募対象：本学会に所属する若手研究者
- ・授与対象：直近の学会誌『インターカルチュラル』に掲載された論文、又は会員の自薦、他薦により推薦のあった論文で大学紀要などに掲載された論文等
 - ・応募書類：応募書類は審査後に返却いたします。
- ・応募結果の発表：第22回全国大会総会において発表し、授与式を行います。
- ・応募先/問い合わせ先：日本国際文化学会事務局 jsics@world.ryukoku.ac.jp

会費納入のお願い

2022年度会費を未納の方はお振込みをお願いします。

正会員 一般会員：10,000円、大学院生：5,000円 学部生：2,000円（学会誌は別途購入）

◆ゆうちょ銀行へ振替用紙を使用してお振込みの場合◆

記号番号：00920-8-325835

◆ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合◆

ゆうちょ銀行 店番〇九九・店番099・当座預金・口座番号0325835 名義：日本国際文化学会

- ・過去の会費未納分は相当額の学会誌購入で充当できます。
- ・会費納入に困難を覚える方に対する減免制度があります。

※詳細は事務局までお問い合わせください。

学会誌の販売について

学会誌『インターカルチュラル』の追加購入や、バックナンバーのお求めは日本国際文化学会事務局まで、メールまたは郵便にてご連絡ください。

名簿作成のご協力お礼と会員情報の変更時のお願いについて

現在、会員名簿作成の最終調整中です。作成にあたり、会員のみなさまには貴重なお時間を割いていただき誠にありがとうございました。完成まで今しばらくお待ちください。

また、4月以降にご所属が変更になる等の会員情報変更の際には、事務局までご連絡いただけますと大変ありがたく存じます。どうぞよろしくお願い致します。

問い合わせ先：日本国際文化学会事務局（担当：池田） kumagusu@world.ryukoku.ac.jp

【編集後記】

1月の常任理事会では龍谷大学で会員の先生方にお会いでき、楽しい時間を過ごすことができました。編集者・高橋はただいまフランスの遊び「ペタンク」に夢中です。的に向けて鉄球を投げるだけ！いずれ学会でペタンクワークショップなどやりたいものです。



鉄球を的の近くに投げた人の勝ち！